序

口腔アレルギー症候群(oral allergy syndrome：OAS)は，食物アレルギー診療ガイドラインの病型分類では特殊型に区分されているが，食物の接触部である口腔内にアレルギー症状をきたす基本的な食物アレルギーの病型である。近年，罹患患者数が増加していると多くの臨床家が実感されている。感作経路と原因となる食物や抗原が極めて複雑なこと，その概念が曖昧なことなどから理解しにくい病型でもある。しかし，見方を変えるとその病態の複雑さから研究対象としては極めて興味深い。OASは今後も新たな抗原や感作経路が同定される可能性を含んでいるからである。

本書は，このようなOASの考え方から，これまでのOASの知見を整理することとした。OASの疫学を札幌医科大学の澄川康之先生に，花粉－食物アレルギー症候群(pollen-food allergy syndrome：PFAS)の総論を横浜市立大学の相原道子先生に，シラカンバ／カバノキ花粉症に合併するPFASを福井大学の藤枝重治先生に，ヨモギ花粉症に合併するPFASを藤田医科大学の矢上晶子先生に，ブタクサ花粉症に合併するPFASを相模原病院の福冨友馬先生に，イネ科花粉症に合併するPFASを島根大学の千貫祐子先生にご執筆いただいた。また，豆乳アレルギーを加古川医療センターの足立厚子先生に，甲殻類によるOASを横浜市立みなと赤十字病院の中村陽一先生に，魚類によるOASを千貫先生に，OASとFDEIAの合併例をはらだ皮膚科クリニックの原田晋先生にご執筆いただいた。さらにOAS発症についての基礎的研究を東京医科歯科大学の横関博雄先生に，厚生労働省科学研究事業「生命予後に関わる重篤な食物アレルギーの実態調査・新規治療法の開発および治療指針の策定」研究班でご指導をいただいた大阪大学名誉教授の片山一朗先生には，OASの病態解析と治療の展望についてご執筆いただいた。

本書が，OASの理解と今後のさらなる病態解明の補助になれば幸いである。

2018年12月

森田 栄伸